

～ 平成 22 年夏のボーナス・消費アンケート調査結果 ～

受取予想と生活実感

概 況

鳥取県内における今年の夏のボーナス受取予想額(回答者 1 人当たりの平均)は、対前年増加率+2.2 ポイントの 37 万 0 千円と 8 千円の増額予想となり、厳しかった前年を若干上回り、5 年ぶりに増加した。

ボーナスの使いみちは、前年夏と比較すると「貯蓄・投資」、「借金・月賦などの返済」、「毎月の家計の赤字補填」は減少する予想となった。「買物などの消費」に使うボーナスの配分割合は増加している。

現在の暮らし向き実感と今後の暮らし向き予想は、ともに過去 10 年間で最低であった前年よりは改善し、消費支出を抑えている割合も若干減少した。世界的な景気後退の影響を受けた前年に比べ緩やかではあるが改善傾向にあることが窺われる結果となった。

＜ 調 査 要 領 ＞

調査目的 ボーナスの受取予想額、使いみち、貯蓄、消費に対しての考え、実態を把握する為

調査対象 鳥取県内の勤労世帯の家計を主に取り仕切る方 1,000 名

調査期間 平成 22 年 5 月 14 日(金)～5 月 31 日(月)の 12 営業日(毎年夏と冬に実施)

調査方法 鳥取銀行の各支店を通じ、所定の調査票によるアンケート方式

＜ 回 答 状 況 ＞

回答者数 664 人(回収率 66.4%)

回答者のうち、生計主体となる方の職業及び年齢構成

(単位:人)

	全体	公務員	会社員	その他
全体	664	137 (20.6%)	469 (70.6%)	58 (8.7%)
20 歳代	177 (26.7%)	26	140	11
30 歳代	192 (28.9%)	38	142	12
40 歳代	172 (25.9%)	37	120	15
50 歳以上	123 (18.5%)	36	67	20

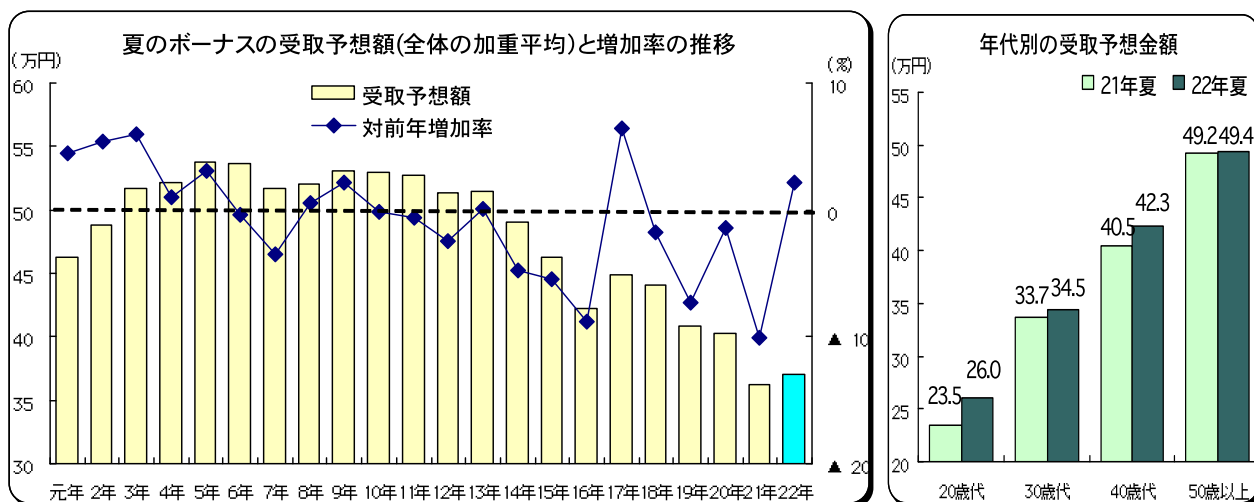
要 旨

1. **ボーナス受取予想額**(回答者1人当たりの平均)は、対前年増加率+2.2ポイントの37万0千円と8千円の増額予想となり、厳しかった前年を若干上回り、5年ぶりに増加した。
2. **ボーナスの使いみち**は、「貯蓄・投資」に26.5%(前年比▲1.0ポイント)、「買物などの消費」に24.0%(同+0.1ポイント)、「借金・月賦などの返済」と「毎月の家計の赤字補填」の計に27.3%(同▲1.1ポイント)、「その他(レジャー関連・学資等)」に22.2%(同+1.9ポイント)となり、「レジャー」や「住宅改善」などは増加したが、「貯蓄・投資」や「借金・月賦などの返済」・「毎月の家計の赤字補填」は減少した。
3. **貯蓄・投資の目的(複数回答)**は、1位「子供の教育費」、2位「老後の生活費」、3位「病気・災害の備え」となった。
年
代別で一番割合が高かった項目は、20歳代が「レジャー資金」、30歳代・40歳代が「子供の教育費」、50歳以上が「老後の生活費」となった。
4. **貯蓄・投資の方法と種類(複数回答)**は、1位「銀行等の定期預金」、2位「銀行等の普通預金」、3位「財形貯蓄」と
なり、前年と比較すると「銀行の定期預金」が増加し、「銀行等の普通預金」は減少した。
5. **金融商品の選択基準**は、前年夏と比較すると「収益性」が若干増加したが、第一に「安全性」、第二に「流動性」であった。
6. **購入希望商品(複数回答)**は、1位「洋服」、2位「テレビ」、3位「スポーツ用品」、4位「家具」、5位「パソコン」となり、
前年夏と比較して、「スポーツ用品」は9位から3位、「オーディオ機器」も14位から6位と順位を上げた。一方、「冷蔵庫」は4位から17位と順位を下げた。
7. **暮らし向きについて**、現在の暮らし向き実感DI(「良くなった」-「悪くなった」)は▲30.7(前年夏▲42.9)と改善し、今後の暮らし向き予想DI(「良くなる」-「悪くなる」)も▲39.1(同▲58.7)と改善する見込みである。
8. **家計の消費支出**は、「抑えている」が45.1%(前年比▲9.8ポイント)、「増えている」が9.9%(同+1.8ポイント)で若干改善している。家計の消費支出の抑制理由(複数回答)の1位は「世帯収入の減少」の53.7%(前年比▲6.4ポイント)で、増加理由(複数回答)の1位は「出産・進学等の特別支出」の61.5%(同+5.9ポイント)であった。消費支出が減った項目(上位3位まで)は、1位「外食費」、2位「旅行費」、3位「被服・履物費」で、増えた項目(上位3位まで)は、1位「食料品費」、2位「教育費」、3位「交際費」であった。

1. ボーナスの受取予想額 37万0千円(対前年増加率+2.2ポイント)と5年ぶりに増加

鳥取県内の今年の夏のボーナスの受取予想額は、全体の加重平均(回答者1人当たりの平均)で37万0千円(対前年増加率+2.2ポイント)と前年比8千円増額する予想となり、5年ぶりに増加した。

年代別で見ると、20歳代は26万0千円(同+10.7ポイント)で2万5千円増額、30歳代は34万5千円(同+2.2ポイント)で8千円増額、40歳代は42万3千円(同+4.4ポイント)で1万8千円増額、50歳以上は49万4千円(同+0.5ポイント)で2千円増額となり、前年と比較してすべての年代で増加した。また、職種別に平均受取予想額をみると、公務員は51万4千円(同+3.2ポイントで1万6千円増額、会社員は34万3千円(同+5.2ポイント)で1万7千円増額となり、公務員、会社員ともに増額となった。

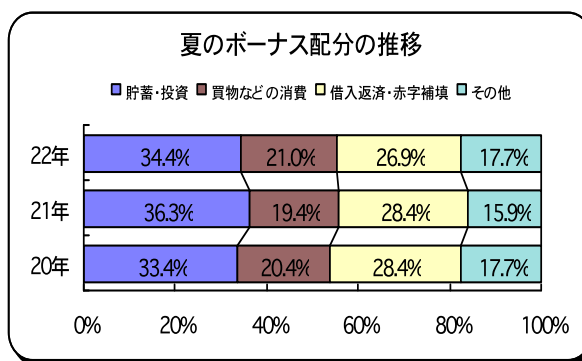
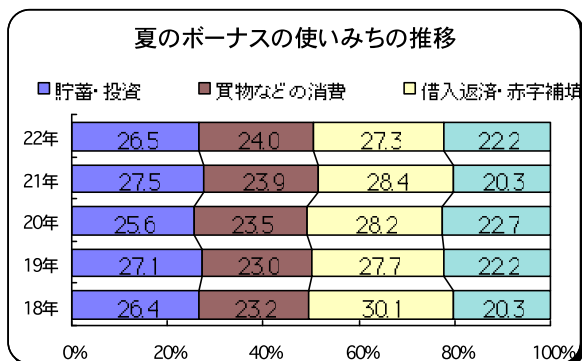


2. ボーナスの使いみち 「レジャー」や「住宅改善」が増加。貯蓄や返済は減少

今年の夏のボーナスの使いみちは、項目別では、「貯蓄・投資」が26.5%(前年比▲1.0ポイント)、「買物などの消費」が24.0%(同+0.1ポイント)、「借金・月賦などの返済」と「毎月の家計の赤字補填」の計が27.3%(同▲1.1ポイント)、「その他(レジャー関連・学資等)」が22.2%(同+1.9ポイント)となり、「貯蓄・投資」と「借金・月賦などの返済」・「毎月の家計の赤字補填」が減少した。また、「その他(レジャー関連・学資等)」は全体では1.9ポイント増加したが、その中で「レジャー」を選択した割合は、+1.1ポイント増加し、「住宅改善費用」を選択した割合は+0.7ポイント増加した。

ボーナスの配分別(全体の何割を項目に使用する)では、「貯蓄・投資」が34.4%(前年比▲1.9ポイント)、「買物などの消費」が21.0%(同+1.7ポイント)、「借金・月賦などの返済」と「毎月の家計の赤字補填」の計が26.9%(同▲1.5ポイント)、「その他(レジャー関連・学資等)」が17.7%(同+1.8ポイント)となり、「買物などの消費」や「その他(レジャー関連・学資等)」が増加した。

ボーナスの使いみちに「買物などの消費」を選択した割合は前年とほぼ同水準(+0.1ポイント)だが、配分割合(+1.7ポイント)は増加しており、消費は厳しかった前年に比べ、若干改善傾向にあることが窺われる。

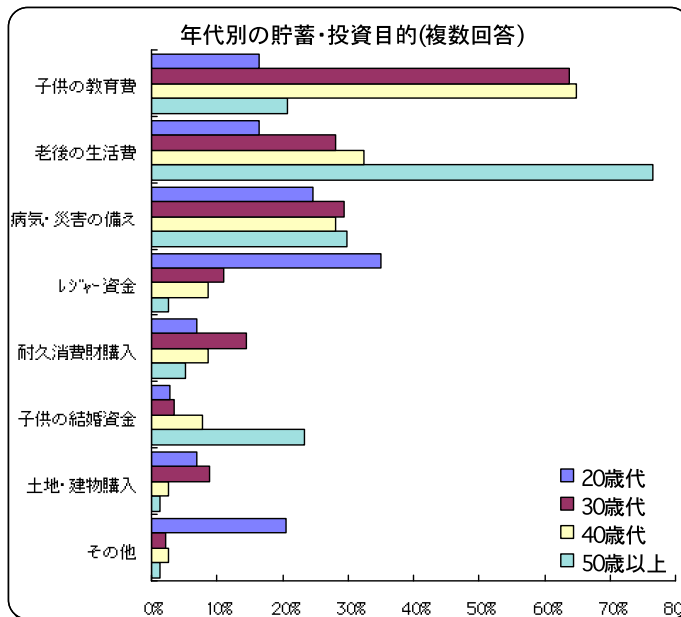
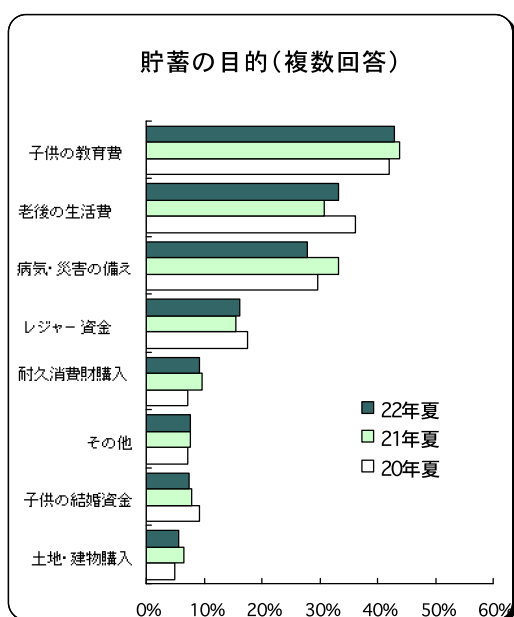


3. 貯蓄・投資の目的 全体で「子供の教育費」がトップ

今年の夏のボーナスの使いみちで、「貯蓄・投資」を回答した方にその目的(複数回答)を尋ねたところ、「子供の教育費」が 43.0%(前年夏 43.8%)で最も多く、次いで「老後の生活費」が 33.3%(同 30.7%)、「病気・災害の備え」が 27.8%(同 33.3%)と続き、前年の順位と較べると「老後の生活費」と「病気・災害の備え」の順位が逆転した。

前年と比較して「老後の生活費」が+2.6 ポイント(前年夏 30.7%→今年夏 33.3%)、「レジャー資金」が+0.8 ポイント(同 15.5%→同 16.3%)増加し、「病気・災害の備え」が▲5.5 ポイント(同 33.3%→同 27.8%)、「子供の教育費」が▲0.8 ポイント(同 43.8%→同 43.0%)減少した。

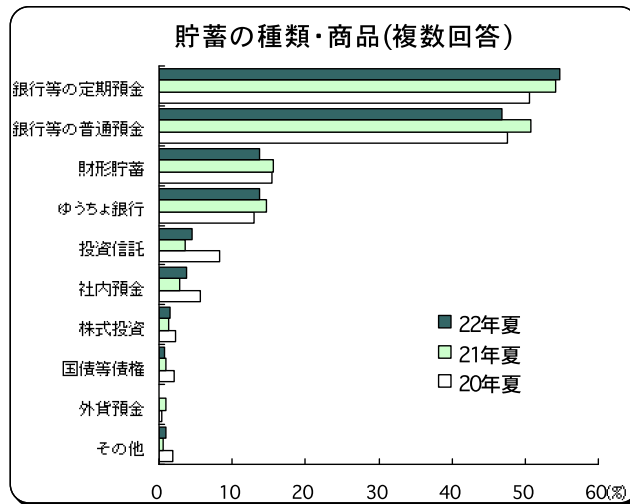
各年代にみると、20 歳代では「レジャー資金」が 34.9%と高く、30 歳代と 40 歳代では「子供の教育費」がそれぞれ 63.7%と 65.0%、50 歳以上では「老後の生活費」が 76.6%と高くなっている。



4. 貯蓄・投資の方法 銀行等の預金、ゆうちょ銀行が上位

今年の夏のボーナスの使いみちで「貯蓄・投資」と回答された方に、その方法と種類(複数回答)を尋ねたところ、「銀行等の定期預金」が 54.7%(前年夏 54.2%)、「銀行等の普通預金」が 46.9%(同 50.8%)、「財形貯蓄」が 13.8%(同 15.5%)、「ゆうちょ銀行」が 13.8%(同 14.7%)と続き、上位は前年と同順位であった。

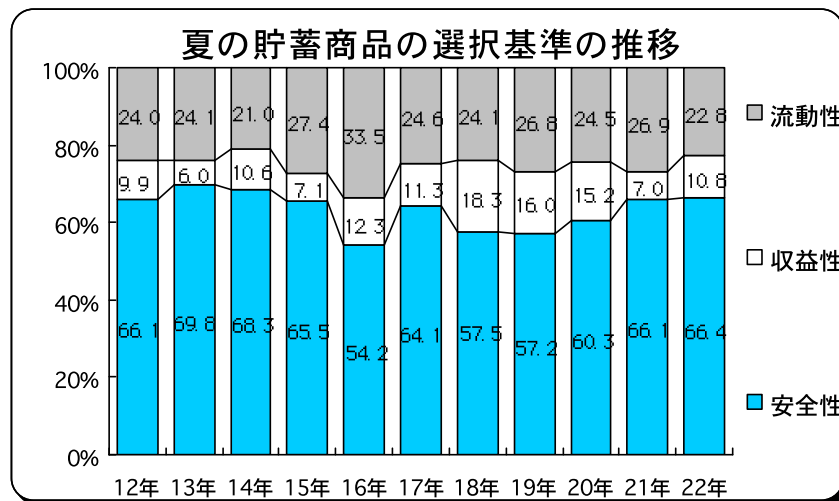
主な増加項目は、「投資信託」+0.9 ポイント(前年夏 3.6%→今年夏 4.5%)、「社内預金」+0.9 ポイント(同 2.8%→同 3.7%)、「銀行等の定期預金」+0.5 ポイント(同 54.2%→同 54.7%)。主な減少項目は、「銀行等の普通預金」▲3.9 ポイント(同 50.8%→同 46.9%)、「財形貯蓄」▲1.7 ポイント(同 15.5%→同 13.8%)、「外貨預金」▲0.8 ポイント(同 1.0%→同 0.2%)となった。



5. 金融商品の選択基準 「安全性」重視が一段と強まる

貯蓄や投資を行う際の金融商品の選択基準(1項目のみ回答)について尋ねたところ、「安全性」を最も重視するという回答が66.4%(前年比+0.3ポイント)、次いで「流動性」が22.8%(同▲4.1ポイント)、「収益性」が10.8%(同+3.8ポイント)となった。

前年夏と比較すると「流動性」が減少し、「安全性」と「収益性」が増加しており、特に「安全性」が3年連続で増加しており、「安全性」を重視する傾向が続いていることが窺える。



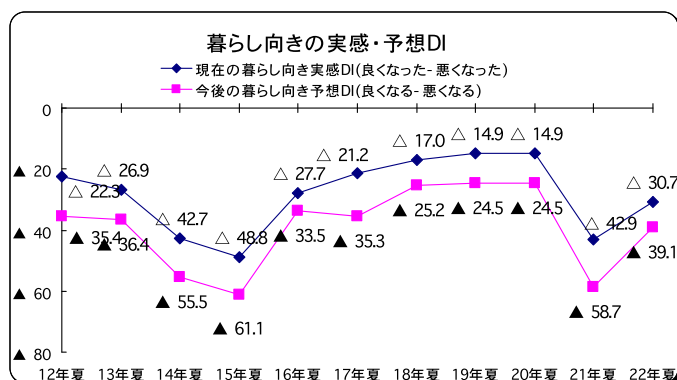
6. 購入希望商品 洋服とテレビが上位。増加幅ではスポーツ用品が1位

今年の夏のボーナスで購入したい商品(複数回答)は、1位「洋服」37.8%(前年夏 33.5%)、2位「テレビ」23.9%(同 23.9%)、3位「スポーツ用品」11.2%(同 5.0%)、4位「家具」7.3%(同 5.5%)、5位「パソコン」6.8%(同 6.9%)となった。「スポーツ用品」は9位から3位、「オーディオ機器」は14位から6位と順位を大きく上げた一方、「冷蔵庫」は4位から17位と順位を大幅に下げた。また、増加幅が一番大きかったのは「スポーツ用品」(前年比+6.2ポイント)であった。

	平成20年夏			平成21年夏			平成22年夏			
	割合	順位	増減	割合	順位	増減	割合	順位	増減	
洋服	34.4	1		33.5	1	▲0.9	37.8	1	→	4.3
テレビ	18.8	2		23.9	2	▲5.1	23.9	2	→	0.0
スポーツ用品	7.3	3		5.0	9	▲2.3	11.2	3	↑	6.2
家具	6.8	6		5.5	6	▲1.3	7.3	4	↑	1.8
パソコン	7.1	5		6.9	3	▲0.2	6.8	5	↓	▲0.1
オーディオ機器	4.1	11		2.5	14	▲1.6	6.2	6	↑	3.7
デジタルカメラ	1.7	16		5.7	4	▲4.0	5.9	7	↓	0.2
乗用車	3.7	12		4.1	11	0.5	5.7	8	↑	1.6
DVDプレイヤー(レコーダー含)	6.8	6		5.3	7	▲1.6	4.1	9	↓	▲1.2
エアコン	7.3	3		5.3	7	▲2.0	3.9	10	↓	▲1.4
パソコン周辺機器	4.9	8		4.6	10	▲0.3	3.9	10	→	▲0.7
調理器具・レンジ	4.4	9		3.4	13	▲0.9	3.6	12	↑	0.2
FAX・電話(携帯・PHS含)	4.4	9		3.7	12	▲0.7	3.0	13	↓	▲0.7
洗濯機	3.4	13		2.1	17	▲1.4	3.0	13	↑	0.9
ゲーム機	2.7	15		2.5	14	▲0.2	2.7	15	↓	0.2
ビデオカメラ	1.7	16		2.3	16	0.6	2.7	16	→	0.4
冷蔵庫	2.9	14		5.7	4	▲2.8	2.3	17	↓	▲3.4
その他	17.3	-		8.0	-	▲9.3	12.3	-	-	4.3

7. 暮らし向き 現在の暮らし向き実感と今後の暮らし向き予想ともに改善

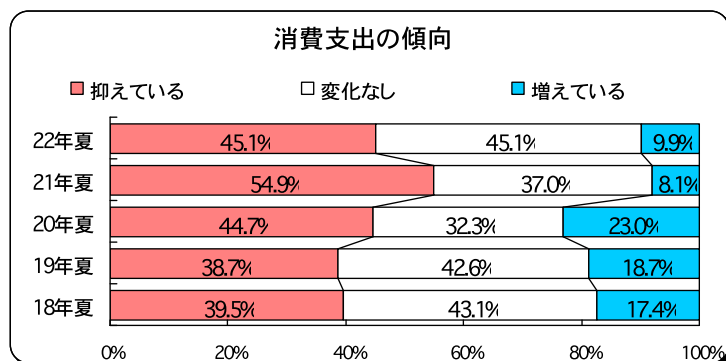
現在の生活実感を前年と比較すると、「良くなった」が2.1%(前年夏0.6%)、「悪くなった」が32.8%(同56.1%)でいずれも改善した。「良くなった」から「悪くなった」を差し引いた現在の暮らし向き実感DIは▲30.7と、前年夏の▲42.9から12.2ポイント改善した。また、今後の暮らし向き予想は、「良くなる」が2.3%(同0.3%)で、「悪くなる」が41.4%(同62.4%)で、いずれも改善し、今後の暮らし向き予想DIも▲39.1と、前年夏の▲58.7から19.6ポイント改善した。



8. 消費に関する動向

(1) 消費支出の動向 「抑えている」が減少

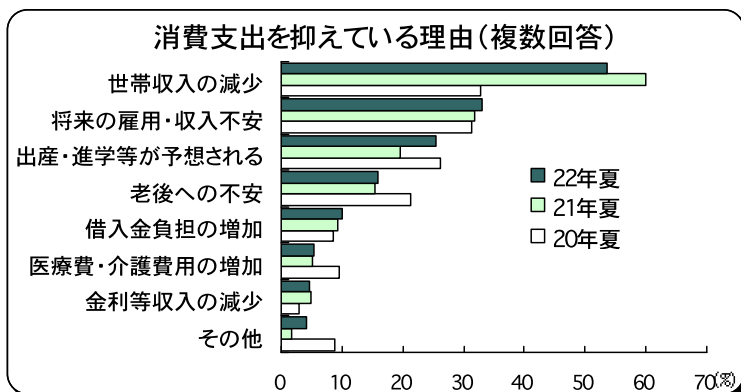
最近の家計の消費支出の傾向は、「抑えている」が45.1%(前年夏54.9%)、「変化なし」が45.1%(同37.0%)、「増えている」が9.9%(同8.1%)となり、前年と比較し「抑えている」(▲9.8ポイント)が減少し、「変化なし」(+8.1ポイント)と「増えている」(+1.8ポイント)が増加した。



(2) 消費支出を抑えている理由 「世帯収入の減少」が減少

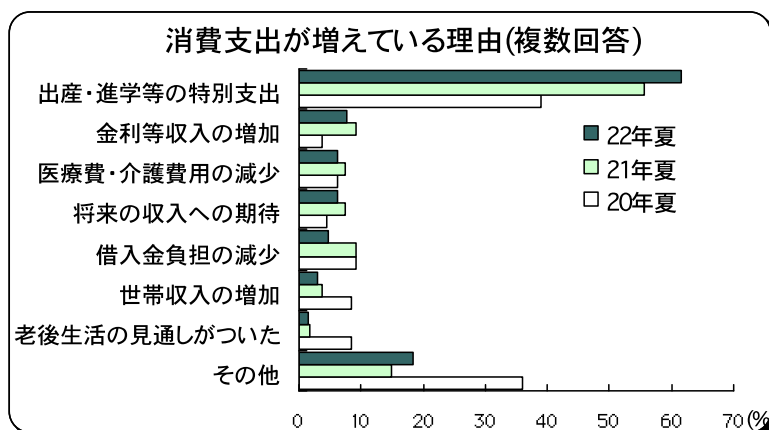
「消費を抑えている」と回答した方に、その理由について尋ねたところ(複数回答)、「世帯収入の減少」が 53.7%(前年夏 60.1%)と前年夏に続き最も多く、次いで「将来の雇用・収入不安」が 33.1%(同 31.8%)、「出産・進学等が予想される」が 25.3%(同 19.6%)、「老後への不安」が 15.9%(同 15.5%)と続いている。

前年夏と比較すると、「世帯収入の減少」が▲6.4ポイント減少している。



(3) 消費支出が増えている理由 「出産・進学等の特別支出」が高い割合

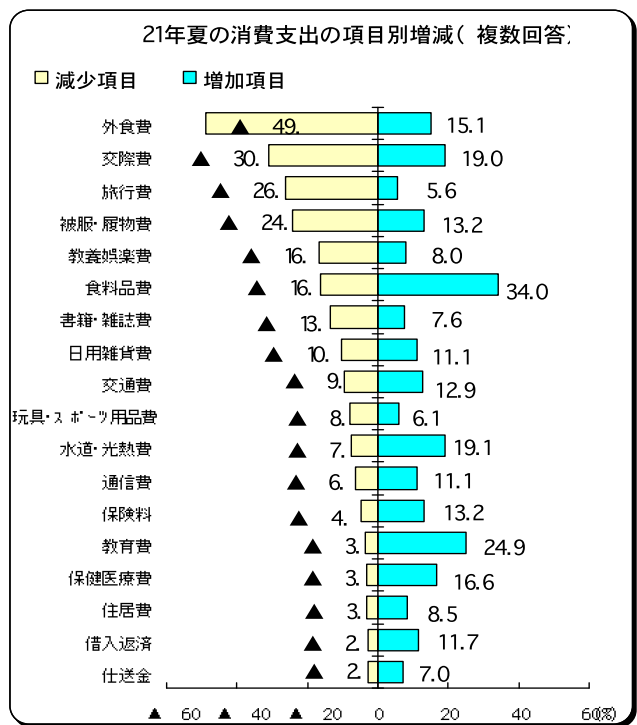
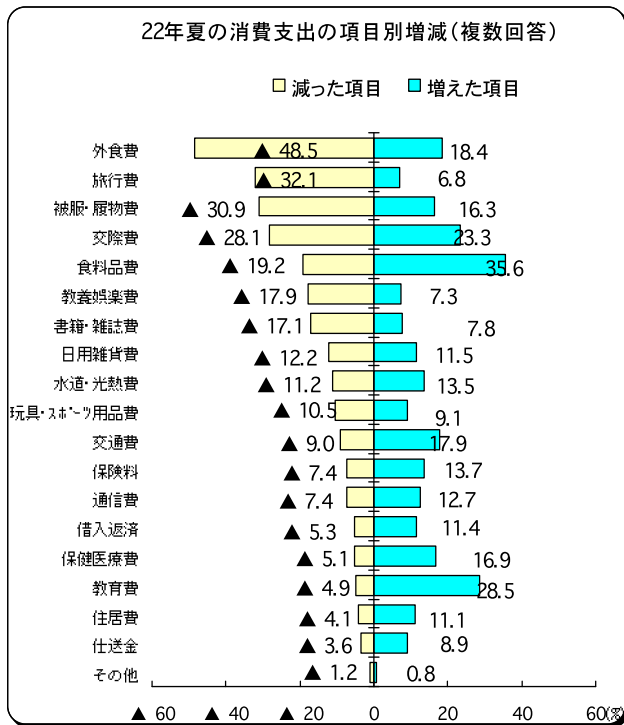
「消費支出が増えている」と回答した方に、その理由について尋ねたところ(複数回答)、「出産・進学等の特別支出」が 61.5%(前年夏 55.6%)と最も回答が多く、次いで「金利等収入の増加」が 7.7%(同 9.3%)、「医療費・介護費用の減少」6.2%(同 7.4%)、「将来収入への期待」6.2%(同 7.4%)と続いた。



(4) 消費支出項目の増減 「増えた項目」では「交通費」、「減った項目」では「被服・履物費」が増加

最近の家計の消費支出の「増えた項目」と「減った項目」(上位3項目まで回答可)を尋ねたところ、「増えた項目」では、「食料品費」が 35.6%(前年夏 34.0%)で最も多く、次いで「教育費」28.5%(同 24.9%)、「交際費」23.3%(同 19.0%)、「外食費」18.4%(同 15.1%)と続き、前年夏と比較して「交通費」が+5.0ポイント、「交際費」が+4.3ポイント増加し、「水道・光熱費」が▲5.6ポイント減少した。

「減った項目」では、「外食費」が48.5%(前年夏49.0%)で最も多く、次いで、「旅行費」32.1%(同26.2%)、「被服・履物費」30.9%(同24.2%)、「交際費」28.1%(同30.9%)と続き、上位は前年と同様の項目であった。「被服・履物費」(同+6.7ポイント)、「旅行費」(前年比+5.9ポイント)、「水道・光熱費」(同+3.8ポイント)などのポイントが拡大している。



以上
アンケートにご協力頂き有難うございました。